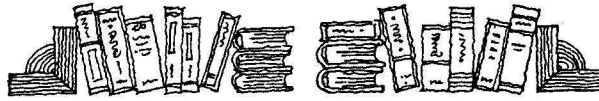


国語国文学会だより (仮称)

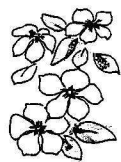


1989. 5

国文学科卒業生の会

春の総会へのご案内

平成元年度春の総会・研究発表会を、五月十八日(木)開催します。ご多忙の御事と存じますが、お誘い合わせの上、ご出席くださいますよう、ご案内申し上げます。
時・平成元年五月十八日(木) 午後一時三十分
場所・香雪館 四〇一号室



開会の辞

研究発表

(1) 三島由紀夫―その行動の花―

午後一時三十分

昭和六十三年卒業生 井口 陽子

(2) 与謝野晶子の読書体験―源氏物語の場合―

大学院修了生 ゲイ・ローリー

(3) 『或る阿呆の一生』―「ぼんやりした不安」をめぐって―

文学部助手 黒沢真奈子

(4) 万葉集羈旅歌についての一考察

―柿本人麻呂羈旅歌八首を中心に―

大学院博士課程 成島 知子

総会

(1) 昭和六十三年活動報告・会計報告

午後三時十分～四時三十分

(2) 平成元年度活動計画・予算案 学生・卒業生

(3) 自主ゼミ設立紹介

(4) 役員紹介

(5) 国語国文学会会長挨拶

(6) 奨学金授与

(7) その他

(8) 閉会の辞

拡大設立総会・講演会開かれる

昭和六十三年十二月三日、日本女子大学国文学科国語国文学会の拡大設立総会・講演会が成瀬記念講堂に於いて、開催されました。

講演会は、青木生子学長を講師に迎え、「私の学んだこと、生きてきたこと」と題して行われました。(要旨次ページ)

麻原美子本会会長の挨拶で総会に入り、研究室メンバーの紹介、続いて議長選出、設立趣意の説

明、設立の承認、会則の承認、役員選出経過説明、役員の紹介、年間事業計画、予算案承認と、議事が進められ、可決、承認されました。
これによって、従来の教職員、在学生中心の学会から、卒業生を含む三者の連帯によって、さらに研究の推進、活動の拡大、生涯教育の一端を担って、新たなスタートを切りました。

私の学んだこと、生きてきたこと

日本女子大学学長

青木生子

私は決して、いわゆる学問的教育的な環境に恵まれて育った者ではありません。ましてや、女性が学ぶことについては、障害の多い戦前のことです。女学校からさらに上級学校に進むには、とくに私の場合、正直いって大変な抵抗がありました。と申しますのは、私は東京日本橋の横山町に商家（問屋）の二女として生まれました。関東大震災で、2歳にならぬ時に父を失い、30歳になるかならぬかで未亡人になった母にとって、親戚縁者その他のしがらみの中で、子供を立派に育て上げること、つまり娘なら、よい所へきちんとお嫁にやること、任をまっとうすることであったとしても、それは当時として至極当然なことでありました。女子大を卒業したら婚期を逸すると反対

されながら、かろうじて許された進学でした。その私が、女子大の国文科を選ぶには、あるきっかけがあったのです。

女学校の4年生、といえはいまの高校1年生の時でした。交友会雑誌に載せるというので、私は夏休みをかけて「万葉集の心」という50枚ほどのレポートを興味のままだに書きました。それがたまたま日本全国の交友会雑誌の中から選ばれ、表彰されたということを、校長先生から知らされました。その審査員の一人、久松潜一先生が私のを推して下さったのだということも聞きました。

日本女子大学校の案内書を見て、国文学部の教授陣の中に、この久松先生の名前を発見した私は、即座にこれだと決めたのです。

女子大生の頃

女子大学校にともかく入った、といって、そこで私の学問的要求が——その頃はその頃で私はひどく生意気でしたので——すべて叶えられたわけではありませんでした。もっと何かがあるはずだ、と悩み、いろいろと彷徨し始めました。

ちょうど大学2年生の秋の頃でした。図書館の暗い一隅で、一冊の本を見つけました。いま思えば、私の生涯を決定することになった運命的な本に出会ったのです。この本は、いままでの国文学を学問的世界的視野の下に体系づけた、まさに当時学界に新風を樹立した『日本文芸学』という本でした。私はこの方向に進むことで、すべてが新しく開けると思いこんだのです。これこそ私の求めているもの、この著者、岡崎義恵先生の下で勉強したい、とその時のどうしようもない胸のときめきをいまでもはつきり憶えております。

そして、この本の著者が東北帝国大学の教授であることを知って、私はまるで運命の引き合わせのようにふるえました。果たして自分が将来、学問をやってゆくにふさわしい人間であるか、また環境であるか、なんて周りを見回すゆとりなど全くなく、ただただ、自分の求めているものにつき進むことより外に、何も考えられませんでした。

杜の都仙台で

私が東北帝国大学に入学したのは、昭和17年4月でしたが、法文学部数百名の中、女性が多分6名でした。

私は、大学生活にひたむきに励みました。

私は学問というものが、どんなものであるかを本当に知り、そこではじめて求めていたものに会ったのです。これこそ、私にとって、かけがえのない貴重な青春時代であったと、いまもはつきりいうことができます。

誘われるままに私が本学に戻ってきたのは、東北帝大を卒業してすぐの昭和19年11月であります。それまでついぞ教師になることを考えてもみなかった私が、以来ずっと、この日本女子大学と共に今日まで生きてきてしまったというわけでございます。

私はたくさんさんの恩師に恵まれましたけれど、せんじつめると、純粹学問の世界における東北帝大のかの岡崎義恵教授と、教育の世界における女学校時代のK先生とであると申せましょう。この二人の恩師によって、私の中には、学問と教育とが深く結ばれて、培われてきたことを思い知るのであります。

教育とは

ところで終戦直後の昭和23年、このK先生によって一つの雑誌が創刊されました。主に

女子高校生を対象にした「いづみ」という雑誌です。

やがて、この「いづみ」が下地になり、学ぶ意志と能力を持ちながら、大学に進学できない人々のかなしみに応えて、通信大学講座なるものが誕生することになりました。

私はこの仕事にそれこそ主幹のK先生と一緒にになって奔走し、精魂を傾けてやっていた中で、自らが大きく目を開かれてゆきました。そして、教育の原点の何たるかを思い知らされました。教育とはいかに人間対人間のものであるか。受講生の一人ひとりに語りかけるK先生のまことある言葉、深い愛情を通して、私は、真の教育者の姿を、目の当たりに見た思いを幾度かしてきました。こうした仕事にたずさわりながら、私も自分なりに、一つ一つ大きく大きく成長してきたような気がしました。

学長となって

私の若い頃は、女性が学問をすることについて実に大きな障害のあった時代であり、また私の家の環境でしたが、しかし私は、いまからふり返るからそう思うのかも知れませんが、真正面から困難にぶつかって、障害を突破したといった感じが、どうもありません。もちろん、周囲に理解してもらおう努力はあくまでしながらも、私は一つの方角にしか解決

口はないと思いきまずに、一呼吸おくとか、時に迂回するとか、また発想を変えてみるとかの工夫を、無意識にやってきたようです。気がついたら、自分の中の一歩大切な意志は結局貫いていた、そういった生き方をしていたように思います。

いま思うこと

誇ることはもちろんよくないけれど、いたずらに自己をさげすむところからは、何物も生まれてこないことを、私は自分なりの人生体験からも知り得ました。私は駄目な人間ですと逃げてはいけません。これが、人生の終わり近くにきて、私が学長という重責を引き受けた本当の気持ちです。人生逃げてはいけないうと、自分にいい聞かせたゆえんであり、それは私のこれまでの自然体の生き方の少し進歩した形と思うわけです。

本学には、充電を志す有職者やまた子育てを終えた主婦の三十代、四十代の大学院生も少なくありません。この女性のライフサイクルを見通した生涯学習と結びついた女子大のあり方こそ、今後の大きな課題にならないかならないかと思ひ廻らしています。

(昭和六十三年十二月三日、国語国文学会拡大総会・講演会より要旨を紹介しました。)

お知らせコーナー

国語国文学会へのお誘い

母校での研究活動に、参加しませんか。

活動を円滑に、かつ充実して行うために、より多くの会員の参加が待たれます。

あなたの級友に、ぜひご入会をお勧めください。入会には会費の納入をもって、承認されます。現在、会員は六百名余です。

年間会費 平成元年度 千円

納入方法 郵便局から振替用紙を使って入金してください。

振替番号 東京九一九七〇七

加入者名 日本女子大学国語国文学会

*学会の会誌『国文目白』ご希望の方は、その他に誌代が必要です。本年度分誌代未定ですので、申込み希望のみを、備考欄に明記してください。(千円〜千五百円前後)

*当会から入金のお知らせは致しません。振替用紙の受領票を、保存しておいてください。

平成元年度会費について

昭和六十三年度会費を、平成元年度会費として振替えます。

当会の実質的な活動は、今年度からとなり、昨年度は活動らしい活動も出来ないうちに、

年度が変わりました。そのため、昭和六十三年度は会費をいただかないことにいたしました。同年度分として千円納入の皆さまの会費は、そのまま平成元年度会費として納入——とさせていただきます。ご了承ください。

平成元年度の活動計画について

春の総会で承認されますが、現在秋の講演会、懇親会、自主サークル活動、研究発表会などを予定しています。研究発表をご希望の方は、早めにご連絡ください。

講演会の講師について、また、活動についてのご希望、ご意見がございましたら、企画係あて、ハガキでどうぞ。

自主ゼミ設立について

母校の教室を開放していただき、学会活動の一端として自主ゼミの設立を計画しています。あなたも、ゼミを創設なさいませんか。

ゼミはあくまでも、自主的なもので、講師、リーダーなど、すべてゼミ単位で企画、進行するものです。ただし、当会から若干の研究補助があります。

ご希望の方は、次の条件をお含みの上、ハガキで五月十五日までに、企画係にご連絡ください。希望が多数の場合は、先着順、あるいは話し合いです。

(1) 研究タイトル

(2) 責任者名(回生・住所・電話も)

*ゼミの設立について

・成立はゼミメンバーが最低三名必要
現在、次のゼミの設立が準備されています。

*『枕の草紙』を読む

*中島武雄先生の俳句を読みながら

*国文科卒業生の文学活動をめぐって

参加ご希望の方は、五月十五日までに、

(1) 参加希望ゼミ

(2) 氏名(回生・住所・電話も)

をハガキで、企画係宛お申し込みください。

会報の名称を募集します！

会員の親睦、情報交換などの場として、会報の発行を計画しています。会員のきずなとして、親しみやすい名称はないでしょうか。

どうぞ、名案を編集係までお寄せください。

以上、すべての宛先は、

東京都文京区目白台二一八一

日本女子大学国文学科内

国語国文学会・卒業生会(仮称)

企画、編集係宛

お問い合わせ、申し込み、ご意見などはすべてハガキでお願いします。

発行・日本女子大学国語国文学会
卒業生会・編集係